

多様化する学生とその「学び」のあり方

-

ことばの「学び」を育てるプロジェクト：

教師の「学び」のコミュニティ創出の試み

倉舘健一, 五十嵐玲美, 濱野英巳, 岡野恵

Université Keio

三橋紫, Monique Le Lardic

Université d'agriculture et de technologie de Tokyo, Université Doshisha

教育から学習へ。これは従来の教育への反省として、行動主義 (behaviorism) に基づきたいわゆる「工場型」の発想の教育、すなわち、学習者のニーズ・個人差を無視して画一化した教育を実施する教育方式がこれまで当たり前であったという気づきから生じている流れである。また研究においても、知識をいかに効果的・効率的に教え込んでいくかといったことにより多くの関心が向けられてきた。そこで近年、個々のニーズ・能力・嗜好・スタイルに合った学習環境を提供するという構成主義に基づく発想への転換が図られている。これはまさに教育パラダイムの転回である。日本の言語教育分野においても、多様性を前提として踏まえた「学び」の理論構築、応用・実践の展開が大きな課題となっているのはご承知の通りである。

「学び」のスタイルの多様さを示すモデルも様々なものが提示されており、また能力に関しても同様である。近年の急速な多文化社会化と「コミュニケーション」自体の変化により、これまで正当性を持って外国語教育の基盤的指標と目されてきた「コミュニケーション能力」の概念では、文化やアイデンティティ、イデオロギーといった、「主体性」を形成するものを実際には扱えない事態が浮き彫りとなってきた。そこで異文化能力や異文化リテラシーといった概念が提出され、次第に中心的な位置を占めてきている。さらにアプローチの多様化を積極的に捉える MI (マルチ能力) 理論、主体性の核となる「喜び」を扱うフロー理論の展開なども我々の射程に入るに違いない。様々な言葉で生き、自己を明らかにし、喜び、交わること。日本の外国語教育は、そもそもの *raison d'être* であったはずのコミュニケーションとの接続が急速に現実となった「幸福な時代」を迎えているのである。今ほどに教師が「学び」を動機づける上での条件が整った時代はなかった。ちょっとした発想の転換と意欲を持ちさえすれば、飛躍的に効果を上げることが確実に可能なのだ。

以上の認識からアトリエでは、<学習者の「学び」と関わること=楽しいこと>という、このあまりにも私的な、教員の真の内発的動機について、みなさんと共にまず再確認することから取りかかった。その上で、この楽しみと創発を育むための

Rencontres Pédagogiques du Kansai 2010

理論や技法などを交えつつ、今回アニメーターとなった、担当している言語も、立場も、またプロフィールも一様とは全くいえない複数の教員の実践例をご覧いただき、二つのテーマへの我々の考えを具体的にお伝えした。この稿ではこの概略についてまとめてみたいと思う。

その前に少々説明が必要であろう。先の RPK においては、テーマ 2 の「教育・学習文化」を扱ったアトリエは、テーマ 1 の「教師の再教育」を扱うもう一つのアトリエ、「ことばの「学び」を育てるプロジェクト：教師の「学び」のコミュニティ創出の試み」と平行する形で進められた。というのも、この二つのテーマはわれわれにとって、一つずつ切り取って扱うことができないものであり、これらは「学び」を鍵としてそれぞれを関連づけて示す必要があったからである。そのあたりの事情を先に述べておきたい。

教育の問題であり、「学び」を取り上げる以上自明のこととはいえ、社会人が多く通う語学学校においてフランス語教育に専心している方々も少なくないので、児童・生徒・学生と呼ばれる学習者の存在をまず思い起こしておきたい。彼らは社会が変容しつつあるなか、その人格を陶冶し、人間的な成長を遂げていく過程にある。彼らの家族背景や海外経験なども様変わりしてきており、程度の差こそあれ、多様性というものが社会的に日常的に実感できる現実となってきた。とはいえ、このようにしてようやく日本にまで及んできた多文化社会化の波を受けた社会実態の変容ばかりがこの議論の前提ではない。これに呼応する形で進んでいる、先に挙げた、学習から教育を捉え直そうとする、教育全体の発想の転回の進展がある。本来社会的現実とは切り離して議論されるべきではないにしろ、こうした教育の概念の進化なり変化の流れから、これまでになく学習者ひとりひとりの多様さへの配慮が重要視されてきているのである。日本においても教育政策に動きはあるが、このような「こうすべき」といった議論とは別の次元で大きく展開している、国境を越えた動きのなかにわれわれが取り組んでいる外国語教育、とりわけ「受験」の中心的位置にない英語以外の言語の教育はあると言えるだろう。日本では現在、初等中等教育に浸透しつつあると思われるこのような全体的な流れが、高等教育にまで達しようとしており、また一般の社会人向けの教育や生涯教育にも、温度差こそあれ、直接的・間接的に影響が及んでいる。またその際、我々が取り組んでいるのはとりわけ「外国語」教育であることから、他の教科・科目・講座以上に、コミュニケーションの前提となる主体性や多様性といった観点を取り沙汰されるのは自然の成り行きであろう。

このように教育のあり方がこれまでになく大きな変化を遂げようとしている時代であるが、このただ中にある学習者がいる一方で、彼らとともにひとつの学びの場を形成しているのが、われわれ教師である。このような変化の時代、職業人としての教師にとって、私的な営みであれ、公な営みであれ、これまで以上に重要性を増しているのは、まさに自分のための「学び」である。つまり、「職業」としての特殊性が伴うものの、学び、成長する個人として捉えるならば、学習者に対して言われる主体性や多様性の観点からの捉え直しが、ほぼ同じかたちで一般の教師にも可能であるとわれわれは考えている。学習者が外発的動機付けから内発的動機付け

Rencontres Pédagogiques du Kansai 2010

に向かうことを「学び」を得るカギとしているように、教師も学習者として、またひとりの社会を構成する市民として、あるいは生涯学習の一環として、このような観点から自らを振り返ってみることは、決して無駄ではないはずである。

とはいえ、このような考えは、聖職として教職を捉え、自任されている方には、軽はずみな、強い抵抗感を与えるものに映るのではないかという危惧もある。そこでまず、このようなとらえ直しと実践は、もとより徒な考えから行っているわけではないことをお断りしておきたいと思う。これはあくまでわれわれがひとりひとりの職業条件（語種、教育段階、契約状態、地域など）や特殊性（教育機関の教育理念、規模、組織内の人間関係から規定されるような事情など）の中で、現状での漠然とした困難を前に抱えている問題意識をグループで議論し、最善の手段を講じた結果として辿り着いたものである。ここでは制度的な議論や機関的な取り組みの創設は念頭にはないし、最終的に目指されるものでもないと考えている。これは、いつてみれば市民コミュニティ的な創発の場作りなどをイメージしてもらおうと近いような、そんなコンセプトから着想を得て取り組んだものである。このような議論をテーマ1に引きつけてもう一つのアトリエを構成した。

さて、まず「異なる教育・学習文化にどう取り組むか」というテーマ2についての考えをまとめたい。結論から述べると、われわれは以下の点を念頭に取ることがプラスに作用するものとして捉えている。すなわち (A)「文化的実践」への参加、(B)「経験」に開くこと、この二点である。

まず (A)「文化的実践」への参加について。学習時間も十分でなく、一般に知識伝達型に寄りがちだとされる大学でのフランス語の授業を取り上げてみても、この授業という営みは、よほどの努力を傾けない限り、学生一人ひとりの個々の「学び」と無縁ではいられない。というのも、そもそも大学は教育機関であり、教育とはどの段階であれ「よりよく生きるため」になされるものであり、フランス語教育という分野もその基盤とする目的において同じ土俵の上にあるからである。大学は確かに高等教育と位置づけられており、研究に従事するものを運営主体とする組織でもあり、カリキュラムを構成する設置科目は、学生の人格の陶冶や人間的な成長の過程などとは切り離されるものとして捉えたい向きも当然あるだろう。しかし、これはもちろん、切り離されるべきものではない。耳に入る機会の少なくない、近年の学生の未熟さといわれるようなものを問題にしているのではない。教育なり学習は、生涯学習の中で捉え直されつつあるように、非常に長い、絶え間なく反復される成長の営みであり、大学を卒業することで終わるものではないのである。同様に、社会人を対象とする語学学校などの場合も従ってその例外とは言い切れない。

また逆から考えると、学生のそのような人間的な成長に関わることが専任教員の特権であるというような印象もないわけではない。実際、このような成長に積極的に関わることは、初等中等教育で頻繁に生じているような煩わしい摩擦やトラブルを招き寄せかねないという危惧もあるだろう。しかし、<学習者の「学び」と関わること=楽しいこと>という、このあまりにも私的な、教員の真の内発的動機が確認されるとするならば、契約条件や立場の違いから区別するのではなく、ひとりの教師として、自律的に主体性を発揮していくことが大切なのではないだろうか。教師としての自分に主体性を発揮できなければ、学生に対してそれを求めることは諦

Rencontres Pédagogiques du Kansai 2010

めざるをえないことになるだろう。これでは本末転倒である。この教師としての自律性の担保として、前述の教師の創発のコミュニティが機能することが求められるように考える。

このようにして、授業を通して教師と学習者がお互いに多様な主体性を発揮する場を育てていくことが目指されるのであれば、お互いのコミュニケーションの上で大切な伝達メディアとなるのは、まさしく「文化」であろう。とはいえ、教師ばかりではなく、一般に年長者というものは、年下のものに対して、自分の世代がかたちとして持っている知識や既成のものごと、教材、また個人的な知識や資料、道徳など、つまり「文化」といわれるものをまずなかば一方的に伝えようとしがちな生き物である。しかし、社会は目まぐるしく変容を遂げ、絶対的と思われた社会的能力や価値でさえ、いつの間にか移り変わってしまうような時代を迎えてすでに久しい。いや、これからさらに一層、その変化のスピードを早め、度合いを高めようとしている。このような時代を生き抜いていこうとするものたちにとっては、既にあるものではなく、独自の文化の創造を行えるような態度や能力の形成こそ、内発的動機のもっとも刺激されるファクターとなるのは自然なことであり、これはなにも今に始まったことではないだろう。教育が「よりよく生きる」ことを可能にするものであるならば、フランス語教師といえどもこのことを重く受けとめるべきではないだろうか。科目や、立場の違いはあれ、フランス語の授業であっても、そのような文化の創造に触れる機会を上手に創出することができれば、「学び」を実感できる機会も自ずと増えるはずである。かたちとして見える学力、すなわち「実体的学力」ばかりではなく、このような独自の文化創造を行える「機能的学力」と呼ばれるものが重要なのである。それではこのような学力が獲得されるような機会や場をどのように創り出すことができるだろうか。

その際にカギとなるのが(B)「経験」に開くことである。「経験」とは、個人が直接「全体」に接触するプロセスであり、このプロセスにおいて個人は自分が現実的で具体的だと感じている。その際、自分の経験に責任を持つことが大切であり、ここから自分自身への信頼や自分の可能性への信頼が生まれ、未知のものに勇敢に自信を持って取り組むことができることにつながってゆく。このような「全体」に接触する機会は、外国語のような異文化を扱う場合、非常にスムーズに生み出すことができるはずである。また地球上でのさまざまな距離が大幅に縮まっていく中、人間同士のコミュニケーションを外国語学習の本質的な存在意義と認め、このような対人接触の機会を豊かにしていきさえすれば、「経験」の創出もまた自然と可能なはずである。「協調学習」などといった枠をはめる必要は必ずしもないのかもしれない。巷のコミュニケーションが拡大していくなかで、自ら欲しているかのように、教室を取り巻く環境も、「学び」を取り巻く環境もリソースも、われわれ外国語教育/学習の質を高めてくれる方向に向かうはずである。我々教師はわざわざその邪魔をせず、抗わず、上手にこの波に乗って、学習者たちの「学び」に関わっていればいいだけのことなのかもしれない。

ただ、この「経験」には「感性」が大きな役割を担う。目の前の具体的な状況に直接的に関わる際には、五感も六感も総動員していくこととなる。この人間的な感性の働きによって学習者はひとつの「経験」を経て成長し、またその後の「経験」

Rencontres Pédagogiques du Kansai 2010

を方向付けていくことが可能となる。このような「感性」は、まさに独自の「文化」を創造していこうとする際に大きな力となるものである。このような「感性」は、異文化接触経験を豊かにもっている、われわれ外国語教員がそもそも備えている大切なアイデンティティのひとつであるのかもしれない。さらにフランスを中心とした文化の体系が、過去にばかりではなく、未来に向かって「感性」の守護者を標榜するのだとすれば、この体系の基軸となる大きな「文化」であるところの「フランス語」を扱うわれわれにとっては、なおさらそうであるに違いない。このようなある種の特異な「力」には、一定の不変な部分はあるのかもしれないが、モノや機械的な操作で代用できるものではなく、どうしてもヒトに宿るものに違いない。教師という存在が「学び」に対してどうしても価値を残すものがあるとするならば、この「感性」なのではないかとも思えるのである。なんとかして、この自分にも備わっているはずの「感性」を大切に、最大限活用しながらこれからの教育に当たっていきたくと改めて考えているところである。

最後にテーマ1の「教師の再教育」について、考えをまとめたい。結論としては、二年前より活動を開始し、「ことばの「学び」を育てるプロジェクト」と題して行っているわれわれの実践が具体的な答えとなる。今回のアトリエは、時間的に限られたものの、ほぼこの活動と同じ形態で運営されたものである。

先に述べたように、「職業」としての特殊性が伴うものの、学び、成長する個人として捉えるならば、学習者に対して言われる主体性や多様性の観点からの捉え直しが、ほぼ同じかたちで一般の教師にも可能であるとわれわれは考えている。しかし、この「職業」としての特殊性が教師自身の「学び」を難しいものになっている面が否めない。そこで我々が慎重に、最大限の注意を払って取り組んだのは、教員の鎧(?)を脱ぎ、自分に戻ってとことん楽しみながらオープンな会話をする場の創出である。制度や身分、教条などのしがらみをすっかり解き放ち、お互い尊重し合い、助け合い、相互に生産的なフィードバックをし合い、そしてなによりも心待ちにして集まれる創発的なコミュニティの形成。それがテーマ1への我々の考えである。これからはこの活動の輪を徐々に広げていき、しがらみとおもわれる様々なものからさらに自由な場に育てていきたくと考えている。この場を借りてみなさんに参加を呼びかける次第である。すでに中国語や日本語をご担当の方、また周辺分野・業種の方々にもご参加いただいております、もとよりフランス語に限定した呼びかけでないことは、念のためお断りしておきたい。参加ご希望の方、またご興味をもたれた方は、kr@a8.keio.jp (倉館[フランス語])、あるいは hamano@a3.keio.jp (濱野[ドイツ語])、m-okano@a5.keio.jp (岡野[英語]) までご連絡いただきたい。

アトリエでは、参加いただいたみなさん、おひとりずつから貴重な発言があり、ひきつづき今回のテーマに関して考えを深めることにつながった。またアニメーターとなったわれわれには個人的にも暖かい声を頂戴し、大いに勇気をいただく機会となった。ここでみなさんに改めて深くお礼を申し上げておきたい。

(なお、この研究の一部は、文部科学省学術フロンティア「行動中心複言語学習プロジェクト」の助成を受けた。)